

利休茶室の復原

伊 藤 平 左 門*

Restoration of Rikyu's Tea Arbor

Heizaemon Ito*

(Received May 29, 1990)

Mr. Kageharu Ito described Rikyu's tea arbor in his book titled Sukiyakuhoshu in A.D.1685.

I investigated the Sukiyakuhoshu in detail and found it gives the precise measurements of Rikyu's tea arbor. This book is a rare historical document of building-construction design of Rikyu's time period.

I could, together with my students, restore Rikyu's two mat-tea arbor to its original size on the basis of the measurements described in Sukiyakuhoshu.

『数寄屋工法集』

縦 24.7 cm 横 17.3 cm の袋綴木版本で、巻末に貞享三丙寅年 (1686) 三月上旬 書肆 望 板行 とあり、同 2 年 (1685) の序文に城州山崎住 伊藤景治とある。内容は上、中、下の三巻より成る。上巻の目録に数寄屋外腰懸内腰懸并雪隠之事、萬石据様并手水鉢之事、柴垣猿戸之事、数寄屋之事、萬折釘雛形并打様之事、撞木之事、花生并竹輪切様之事、薄板并風炉敷板之事、囲炉裏縁之事、炭斗并塵取之事、短檠行灯并露地行灯之事、箱脚榻之事、露地げた并塵簀束杖之事。中巻目録に利休囲并数寄屋之事、有楽囲并座敷之事、織部数寄屋之事、道安数寄屋之事、宗貞囲之事、数寄屋品々之事、下巻目録に書院并上段上々段付書院之事、棚之事、堅具之事、畳并敷様之事、屏重門之事、茅門之事、庭之事、鷹部屋之事、鞠懸之事、舞台之事とある。

上巻では待合腰掛、雪隠、堀、中潜り、垣、石、手水鉢など露地の諸施設を含む総構えについて述べ、「数寄屋之事」では三畳台目相伴席付き織部好みの席の平面図を

挙げ、建物の各部の寸法を 217 行にわたり詳しく記し、また茶事に必要な木製諸道具の寸法を書き記して、茶室を造る人のための一般参考書的な性格が感じられる。

中巻の「利休囲之事」の項には利休の茶室と伝えられて現存する国宝指定の待庵の茶室を思わせる二畳隅炉の茶室の平面図と、173 行にわたって建築各部の寸法を記しており、それに続いて有楽、織部、道安、宗貞の茶室など合せて大小 31 の茶室の平面図を挙げている。

下巻はすべて書院造の建築に関する内容のもので、この書の出版より以前の万治元年 (1658) 頃既に出ていた『新編武家雛形』の内容にほぼ類似するもので、この書が原本とはいえない。ただしこの中の「畳敷様之事」は独創的なものであり、「数寄屋之事」、「利休囲之事」の寸法書きに加えて茶室の建築を理解するのに役立つ。

書名は「すきやくほうしゅう」である。序文に「くはうしゅう」と振り仮名を付けている。

著者の伊藤景治とその主君

序文に「予 主君公の命を奉って営作の事を司り 衆工を指揮 (揮) する事年久し」とするから、著者は大名

*建築学科 (Department of Architecture)

に長年仕えた建築係りの武士であったと解される。

本文の「数寄屋之事」の中で三畳台目茶室の風炉先二重棚の棚板の間隔について、

棚の間六寸三分 但淀のハ三寸三分

「萬釘雛形并打様之事」の中で床の釘について、

床の竹釘 だいわの下端より釘の上端迄九分 壁より出端九分 但壺分半ほどぬるなり 淀のは大わより壺寸 出端も壺寸

「花生并竹輪切様之事」に

長サ壺尺貳分 下のかき壺寸六分半 上のかき壺寸六分 中の輪七分 上の輪七分半 両脇のかき残壺寸 下のふしより下へ壺寸五分 是は淀のなり

長サ壺寸六分半 又ハ七分ニ切なり 但淀のには口伝あり

とあるから、著者は淀藩の藩士であり、主君は織部好みの三畳台目の茶室を城内にもち、自らもひとかどの茶室に関しての好みを持つ茶人であったと解される。

淀藩は寛永2年(1625)松平定綱が新たに築城し初代藩主となり、寛永10年(1633)に永井尚政に替わり、万治元年(1658)その子尚征に地位を譲るまで25年の間藩主であった。寛文8年(1668)死亡。翌年長男尚征が宮津に移封のあと石川憲之が藩主になる。序文の貞享2年までの間に松平氏が8年間、永井氏が35年間、石川氏17年間で、永井氏が一番長い。この三氏四代のうち建築土木の造営に深く関与したのは永井尚政であった。

永井尚政は淀に入封する以前は下総古河の城主で、老中職にあり、寛永6年(1629)江戸城山里口石垣普請に助力、寛永9年(1632)台徳院廟、紅葉山霊屋の普請奉行、同14年(1637)江戸城天守普請に助力、同15年(1638)山里数寄屋普請奉行、承応2年(1653)から明暦元年(1655)の間京都御所の造営奉行を勤めている。

尚政が建築工事に極めて明るかったことは、尚政が奉行を勤めた承応度の禁裏造営に従事していた平政隆が記した『愚私見記』の中に、拍土(タタキツチ)の調合についての記録があることで知る事ができる。即ち

一、砂璃土 一升 是ハ六地藏之宜 大仏土 五升 是ハ泥工ノ用ル埴土の事 石灰三升 上タ 伊吹西石灰ハ凶シ 右合而水ヲソソキ拳テジコシコトスル程ニテ …………… 是者永井信濃守殿伝也

とある。工事仕様を細かに指図出来るほどの建築の知識をもっていた事がこれによって知れる。著者の景治を淀藩の建築係にした主君は永井尚政であり、そのように建築技術に明るい奉行役の主君の下で勤めた著者もまた十分建築の知識を身につけていたものと推察出来る。

永井尚政はこの承応度の禁裏造営が終わって後、13年後に83歳で死亡している。翌年に長男尚征が宮津に転封するにあたって、著者景治はどうしたか明らかでない

が、延宝元年(1673)の禁裏造営には尚政の三男伊賀守尚庸が造営奉行になっているから、召し出されて工事に参加しているかも知れない。『愚見記』に記す「御築地奉行伊賀守殿与力」の中に伊藤八郎右衛門の名が見える。

茶人 信斎

永井尚政は信斎と号し、茶人としても名高い。古田織部の弟子として茶人の系図に見える。天正15年(1587)生れ、織部死去の元和元年(1615)28歳であった。小堀遠州とも交わりが深い。老中職にあって江戸城内での將軍への献茶、將軍点茶の代役、茶事の相伴、別業の献茶等『徳川実記』に見られるし、茶会も自らしばしば催している。『旁求茶会記』(大阪府立図書館蔵書)の伊丹屋宗不筆記部分に永井尚政の茶会、七会が記されており、その第六回目正月25日の会記で永井尚政が山崎の妙喜庵にある利休の囲の写しをもっていたことが知られる。このことは既に堀口捨巳博士が著書『利休の茶室』の中に、この会にでている「石川土佐は寛永17年より正保2年まで、小浜式部は寛永4年より正保2年まで、宗不は寛永8年より正保3年まで見えていたので」としてこの茶会を寛永から正保頃までとし、寛永の頃永井尚政が正確な写しを造っていたと述べられているが、今すこしその年代を詰めてみたい。

尚政が淀に就封してから正保年間まで江戸での静動は『徳川実記』により知ることが出来る。

寛永10年(1633)	3.25	下総古河より山城淀に転封。
	4.4	就封の暇を給う。
11年(1634)閏	7.25	淀城にて將軍家光に饗し奉る。
12年(1635)	9.12	江戸に参勤。
13年(1636)	9.12	深川別野で將軍に献膳。
	12.5	韓使入府。往還淀にて接待役。
15年(1638)	6.15	江戸に参勤。
	7.6	品川御殿にて献茶。
	12.11	土井利勝別野の將軍茶事相伴。
16年(1639)	5.5	就封の暇給う。
	9.27	二の丸にて献茶。
	10.20	東海寺沢庵和尚献茶に相伴。
18年(1641)	8.28	西城にて献茶。
19年(1642)	5.5	熨斗を給う。
	9.1	譜第大名参勤交替制毎年8月と定まる。尚政明年参勤予定。

- 正保1年(1644) 1.14 台徳院 13 回忌法要寺社奉行。
 6.26 日光山に登る。
 7.9 帰る。
 7.28 二の丸点茶代役。
 10.27 二の丸茶室にて献茶。
 8.25 酒井忠勝別業茶会相伴。
 11.21 二の丸茶室相伴。
 11.23 就封の暇給う。
 2年(1645)閏 5.8 甘瓜献ず。
 3年(1646) 4.19 日光山より帰る。
 4.22 東叡山行。
 7.11 二の丸に供奉。
 7.27 点茶代役。
 10.15 東叡山行。
 4年(1647) 3.6 面命の旨あり。
 4.24 東叡山行。
 5.24 点茶代役。

寛永19年に譜第大名の参勤交替制を定めており、毎年8月を交替の月とし、尚政は翌年を参勤の年にあてられているが、翌年何月参勤したのか見当たらないし、また次の正保元年11月に就封の暇を給わっていて、8月交替の制度は守られがたかったようである。交替の年月が不明瞭な時もあるが、淀に就封後第一回目の江戸参勤は寛永12年9月から同13年11月頃まで、第二回目は同15年6月より同16年5月まで、第三回目は同17年9月頃より同19年9月まで、第四回目は同20年8月頃から正保元年11月まで、第五回目は同3年春頃からはと推定出来る。それ以外は淀に居たとみてよい。

茶会記は年号を欠いており、第一回目が6月22日、第二回目2月6日、第三回目は1月23日「江戸ニ而」とある。第四回目は5月27日、第五回目は6月24日、第六回目に第七回目はともに1月25日である。第三回目だけが江戸屋敷で行われ、他は淀城内であったらしい。この第六回目の会は書院と次に屋敷とで「振舞」のあと、「妙喜庵ニ而御茶」とある。これは信斎が庵の名を付けていなかったのか、山崎の妙喜庵の写しの茶室と呼んでいたのか、妙喜庵と呼んでいたからなのかは分らない。

床ニ妙喜庵之利休文 御茶拙子(宗不)立申候
 山崎乃妙喜庵ニ有之利休のかこい(茶室)信斎老ニ
 御うつし御立候さしつ(茶室)也 二畳敷にて
 自在御つり瓢箪釜いつも御掛候 反古張也 つきて
 (継手)までも(迄も)山崎のに違いなく候よし
 とある。第六回目の茶会の年を推定すると、第三回目の茶会は信斎が参勤中の1月でなくてはならないから、参勤第一回目の寛永13年か、第二回目の同16年か、第三回目の同18年、同19年かである。それが寛永13年の場

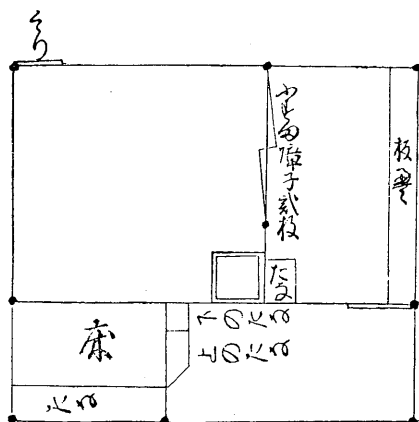
合、第六回目は同15年か、同17年となり、同16年の場合でも同17年で、いずれの場合でも七回の茶会が寛永年中に完了すると推定できる。江戸での茶会が寛永18年以降とすることは最終回の茶会が正保3年にずれ込むから不可能である。淀城内の信斎の妙喜庵写しの茶室での茶会は寛永15年か、17年かであろう。とするとこの写しの茶室はその頃よりすこしは以前に作られていたものと思える。しかし気になるのは、この宗不の会記に瓢箪釜がいつも掛けてあったと記されていることである。第一回目に第五回目が瓜釜、第二回目がひしき瓢箪釜と記されているから、この茶会記だけからはいつもとは理解出来ない。茶会は城内の他の茶室でも行われたと見てよい。宗不は以前から個人的に信斎との交わりがあり、この茶室のことをすでに知っていたのであろう。また大胆な推察をするならば、將軍家光が寛永11年上洛の折、閏7月25日淀城で饗応、献茶しているから、あるいは就封後それに間に合うよう建築したとも推察できよう。

利休の死後約半世紀を経る頃までの山崎妙喜庵の姿を忠実に写した茶室であったといえよう。

「利休囲之事」の解説

平面図の書込みに「くぐり ふすま障子式枚 板置 たな 下のたな 上のたな 床 たな」とある。柱の位置は各所黒丸で表示してあるが、床柱の表示を欠いているし、本文にいう間柱の位置も示されていない。本文で補足して理解しなくてはならない。木版本の性格上図の粗略は致し方ないことであろう。炉が二畳の隅に描かれ、次の間は板畳を入れた一畳の間で、続いて一畳の勝手があり、床の裏側に棚、床の正面にはくぐり(にじり口)がある。一見して現在の妙喜庵の待庵の平面に似るものである。にじり口には板戸があり、その上部に竹格子の付いた窓があり、竹の組子の障子二枚が入っていることが本文で知られる。襖障子二枚は外部に面する方の柱と炉に近い方にある方立との間に立てられている。「つまの方 柱」とあるから屋根は切妻造りで、竹格子窓の上に妻壁があり、板畳のある部分の壁の上とその反対側の外壁の上に軒桁がある。その高さは桁上端迄畳から6尺3寸5分とある。また床の高さ1尺6寸とあるから合せて7尺9寸5分の低い建物である。本文では板畳の入った部屋(次の間)の「つまの方」の柱付近、すなわち下地窓のあるあたりを「通先」(とおりさき)、それに相対する部分にある出入り口を「通口」(とおりくち)と言い、その外側を「勝手」と呼んでいる。通先の壁に低い高さの位置に下地窓があり、一本引きの障子、板畳側壁面に間柱と下地窓と掛障子、勝手の通口の外壁に下地窓と掛障子がある。二畳の間の床に向かって右手外壁には床に近い方に下地窓があり、掛障子を掛ける。それよりにじり

口までの間にも下地窓と一本引きの障子がある。



『数寄屋工法集』所載の平面図

全体の広さは桁行が二畳の間の畳一枚と勝手の畳幅一枚の合計、梁行が二畳の間の畳幅二枚と通先の畳幅一枚と板畳幅の合計である。柱心々寸法は「書院」の項に、一、ほんまのたたみ六尺三寸 いなかま五尺八寸なり一、大目（台目）のたたみの長さ四尺七寸 まなかに一、老尺五寸五分長きにより大目と申なり

とある。茶室であるから台目の項に関係し、当然本間の畳の寸法であるから、桁行の寸法は柱二本分の4寸8分を加えた9尺9寸3分、梁行は柱2本分と板畳幅8寸7分と畳幅3つ分の合計10尺8寸である。

床の間の広さは

横内程（内法）三尺八寸貳分 深サ柱内程貳尺貳寸四分

とある。これは著者伊藤景治が実測したとき、はっきり床の間に奥の柱を確認した上で柱内面から内面迄を測定したと思われるもので、その項妙喜庵の利休囲の床の間の奥に隅柱が見えていたことを示すものと言えよう。しかもかなりつらが付いたものであったと想像される。

にじり口外部の土廂を図に描いていない。本文にも記していない。建物の外部の寸法に就いては軒桁の高さのみであって、軒の出の長さ、屋根の勾配、形状、礎石の大きさ、外壁についても記していない。

軒桁の上端の高さは畳の上端から測っている。外へ出て軒桁の外角で測れば正確に上端の高さは出せないから、軒桁の内側から測ったのだらう。にじり口の畳の上端からが測りやすい。しかしここでの実測作業は軒桁下に廂があると邪魔になって作業は不可能である。この建物にはにじり口上に廂がなかったと推測してよからう。

鴨居と敷居の寸法書きを検討してみると、にじり口を入れて右手の壁の一筋中敷居と鴨居の寸法は

中敷居のはば壹寸三分 厚六分半

鴨居はば 厚 同断（同じ）

とある。この中敷居、鴨居はどのように取付けられているのか、判断しなくてはならない。ここは壁に下地窓があり、壁の内側に見込み4分7厘の障子一枚を納める寸法だけあればよいから、「厚六分半」あれば事足りる。柱と壁の塵は7分5厘であるから、[図1] 中鴨居と柱の塵は1分あって、にじり口の柱のつらの内に納まる。これを逆に「はば壹寸三分」ととれば中敷居が柱のつらより5分5厘はみ出して、にじり口を入れるのに邪魔になるから、中敷居と鴨居の寸法は見付け寸法（立面図に現れる寸法）が1寸3分、見込み（立面図に現れない寸法）が6分半と判断しなくてはならない。

通先の下地窓の中敷居と鴨居についても同じである。但し 「敷居 鴨居の厚九分半に はば壹寸壹分」とあるは、厚六分半の誤刻と思われる。

にじり口上の窓の中敷居の寸法は

はば貳寸貳分六厘 厚サ壹寸四分四厘

とある。この上に引き違いの障子が入り、左右に方立が立つ。見付けが1寸4分4厘は太い感じがするが、にじり口上の幅70 cm程に幅40 cm程の壁約26 kgの目方が懸かっているのだから、この太さは構造的にしかるべきだろう。

その上の窓の左右方立と鴨居の見付け寸法はいずれも7分2厘、方立の見込みは1寸7分2厘と2寸2厘であり、左右に違いがある。鴨居の見込みは1寸8分2厘でどちらの方立よりも小さいから、方立のほうが伸びて角柄を作ることになる。「方立つのから七分貳厘」とあり、角柄の長さは材の見付け寸法に等しい。[図2]

通口の方立と鴨居の関係は見付けはどちらも1寸で、「つのから方立の外つらより壹寸出ル」とあるから、鴨居の角柄も見付け寸法と等しい。

寸法書の内容

柱太さ	0.240 尺		
床高	1.600		
桁高	6.350	(畳上端より)	
にじり口 内法高さ	2.600		
内法幅	2.360		
方立見付け	0.072	見込み	0.142
挟鴨居見付け	0.202	見込み	0.072
くぐり戸 框 見付け	0.065	見込み	0.095
板 幅	0.460	5枚	
竹格子窓 鴨居内法高	1.950	内法幅	4.330

	方立見付け	0.072	見込み	0.187
	小壁方立見付け	0.072	見込み	0.202
	方立角柄	0.072		
	鴨居見付け	0.072	見込み	0.182
	中敷居見付け	0.144	見込み	0.226
	(連子の所で 0.072 欠く)			
	竹太さ	0.065	9 本	
	小壁 幅	0.278		
通先	下地窓内法高	1.690	内法幅	1.910
	塗り出し柱つらより			0.040
	中敷居上より			0.140
	鴨居下より			0.120
	鴨居内法 高さ			1.950
	中敷居高さ	畳より上端まで		1.250
	中敷居見付け	0.110(鴨居同)	見込み	0.065
	障子 横幅	1.980	(組子竹)	
	框見付け	0.040	見込み	0.048
	組子見付け	0.028	縦 2 本 横 4 本	
次の間軒	下地窓内法高	0.700	内法幅	0.960
	位置	(廻縁下端より塗りだし) 0.340		
	掛障子縦	0.980	横	1.140
	框見付け	0.030	見込み	0.047
	組子見付け	0.023	見込み	0.045
	組子数		縦 1 本 横 2 本	
	天井高さ	畳より天井板まで		5.950
	廻縁太さ	0.120		
	竿縁太さ	0.045	竹 2 本×3 通	
二枚障子	内法高さ	4.850	内法幅	4.600
	鴨居見付け	0.072	見込み	0.225
	方立見付け	0.072	見込み	0.215
	板畳 幅	0.870		
	吊り棚 高さ	1.450	(畳より棚板下端まで)	
	板 長さ	1.100	幅 0.930 厚さ	0.045
	吊り竹太さ	0.055	節 7 つ	
通口	内法高さ	5.500	横内法	2.300
	方立見付け	0.100	見込み	0.154
	鴨居見付け	0.100	見込み	0.220
	鴨居角柄	0.100		
床の間	框 見付け	0.240	見込み	0.110
	落掛見付け	0.108	見込み	0.225
	内法高さ	4.620(框上端より下端まで)		
	床柱内法深さ	2.240	内法幅	3.820
	床畳 幅	2.320	長さ	3.820
	床天井高さ落掛下端より	0.400	(原文上端とあるは誤)	
	框より	5.020	(原文 5.01 は誤)	
			内ぬり廻りほら	
	竹釘 太さ	0.015	出 0.060 下がり	0.270

床柱	脇花釘	0.810	落掛下端より	
	正面花釘	0.190	落掛下端より	
	(原文に「又ハ6寸にも打なり」とあるが、信斎が好み述べたのを伝えたものであろうか、打てば1寸9分下りの釘に花生が掛からない)			
床脇下地窓竹止り	高さ	2.540	(畳より)	
	竹 太さ	0.080		
下地窓内法高さ		1.440	内法幅	1.180
掛障子	縦	1.570	横	1.400
組子縦	1本		横	3本
框の太さ			組子の太さと同じ	
吊り竹の位置			床脇柱のつらより	1.890
	太さ	0.060	節 5つ	
同所壁の下地まど中敷居	2.350	(畳より上端まで)		
鴨居内法	1.700			
中敷居見付け	0.130	見込み	0.065	
鴨居見付け	0.130	見込み	0.065	
下地窓位置	にじり口柱つらより塗り出し	0.650		
下地窓	内法高さ鴨居内法と同	横内法	1.580	
	障子横幅		1.880	
	框見付け	0.040	見込み	0.050
	組子見付け	0.016	竹 見込み	0.045
	数		縦 2本 横 3本	
炉上の天井高さ	5.800			
	廻縁太さ	0.120	竹	
	竿縁太さ	0.045	竹 数 2本×2通り	
天井とまり	杉	0.180		
	長へぎ板幅	0.250	数 26枚	
床前天井	幅	1.740	とまりの外つらまで	
	長へぎ板幅	0.250	数 16枚	
	竿縁太さ	0.045	竹 数 2本×4通り	
天井とまり	松	0.170		
駆込み天井垂木掛高さ	5.950			
	垂木掛見付け	0.170		
	小壁高さ	1.180		
下の垂木掛見付け	0.170	壁からの出	0.070	
	竹垂木太さ	0.116	数 4本	
	かきこまい太さ	0.045	数 2本×5通り	
	めんどこまい		数 1本づつ	
	長へぎ板 幅	0.230	数 19枚	
	まとびかき竹		数 3通り	
勝手通口下地窓	縦	0.720	横	1.300
	位置	ぬり出し	0.250	(廻縁下端より)
	掛障子	縦 1.140	木 横	1.450
	框見付け	0.030	見込み	0.047
	組子見付け	0.023	見込み	0.045

竹	縦 2本 横 2本	
天井	高さ 5.880	
	廻縁 木 0.120	
	竿縁太さ 0.045	竹 数 2本×2通り
襖障子	引手 高さ 2.460(下端まで)	
	板畳 幅 0.210	
三重棚	下棚 幅 0.600 長 0.800 厚 0.045	
	中棚 下棚と同じ	
	上棚 先まで 1.570 幅 0.600 厚 0.045	
	高さ下棚下端まで 1.770	
	中棚 下棚のあき 0.550 上棚のあき 2.140	
	吊り竹太さ 0.046	
下地窓小舞竹の位置		
床脇窓	縦 1本 左より 0.780	
	横 1本 下より 0.750	
にじり脇窓	縦 1本 右より 0.550	
	横 1本 下より 1.130	
通先窓	縦 2本 左より 0.100 次 0.950	
	横 2本 下より 0.130 次 0.790	
同高窓	縦 1本 右より 0.430	
	横 1本 上より 0.300	
勝手窓	縦 2本 左より 0.370 次 0.790	
	横 3本 上より 0.080 次 0.240	
		次 0.250

以上の寸法に従って室内の各壁面の展開図を作製してみると、[図5]から[図10]までの如くなる。ただし[図8]と[図9]では、二畳の間と次の間境の二枚障子の鴨居の方立の扱いについて本文に記載を欠くので、通口の鴨居と方立にならない角柄にして作図した。また本文で次の間の間柱の位置についても記載を欠くから、仮に真中におき、下地窓はその左とした。それ以外のところはすべて本文の寸法書きにより作図可能である。建築技術に精通した者の実測野帳と見てよからう。

史料的价值

序文に著者は続いて「古より茶の道に名を得し人々の物すき 数寄屋の法式 すべて當作の故実ある事ども遺忘に備んが為に反古にしるしつけおきぬ いまあつめて是をみれば 既に数十ヶ条にをよべり 依之考訂清書して工法集と名つけ…」と記している。茶人として名高く、建築技術にも明るい藩主に仕えた著者が退職して利休の茶室と伝えられた妙喜庵のある山崎の地に隠棲してから担当した建築工事の覚書きをもとに著述したものとみてよい。彼が何歳の時この序文を書いたのかを調べるすべもないのは残念であるが、仮に70歳以上であったと仮定すると、永井尚政が淀の城主になった寛永10年

に18歳以上であるから、城内に妙喜庵の写しを造るため君命を受けて実測した時の覚書きと見て間違いなからう。もしこの序文の時の年齢がそれ以下ならこの推定は当たらないことになるが、伊丹屋宗不が妙喜庵の利休の茶室にそっくりと言った城内の写しの茶室を永井氏の居城であった寛文9年(1669)2月まではよく見る機会があったはずである。いづれにしても「利休囲之事」の寸法書きは寛永10年から数年後までの間の山崎の妙喜庵の利休の茶室の姿を正確に伝えるとも言えよう。

復原

「利休囲之事」の寸法書きから起こした[図4]から[図10]までの復原図は今の待庵の実測図(『日本建築史基礎資料集成 二十 茶室』の付図)と比較してかなり違いがある。そこで実物大の空間で確かな利休の建築意匠を見たい気持ちである。寸法書きには2厘、4厘、6厘、7厘と1分の1/10を争う単位長さで記されている。難しいかもしれないが、実際に建ててみたいと思った。3坪以下であるから大したことも無からう。考えてみると学校の空地に建てさせていただいたほうがよい。というのは耐用年数の問題である。利休が死んでから400年になる今日まで利休の建てた建物がそのまま存在するとは私はどうしても考えられない。竹の垂木の柿茸の屋根である。柿茸の寿命はせいぜい30~50年だから葺替え、竹垂木も長くはもたないだろうから取替えるにしても、一番大切な面皮柱が生長30年ぐらゐの丸太からしか取れないので建物の寿命は短い筈である。耐久力のある赤身の部分は中心部分に径約20mmぐらゐしかない。腐りが速い。現に私が子供の頃建った茶室が60年ほど経た今倒壊寸前の状態にある。保守管理が不充分なら100年ももたないだろう。学校でなら後の研究者が確認実証するだろう。実験に供したい。

学校当局にお願いしたところ幸いにも承諾いただいた上に、特定研究費まで戴ける有難いこととなった。特定研究協同研究者として建築学科の田中正孝教授、富山博教授、池浩三教授の労を煩わすことになり、学生たちの勉学にも役立つようにと卒業研究生、大学院生とともに作業することにした。参加者の氏名は下記の通りである。

61年度卒業研究生	塩田素也	箕浦隆	渡部勝次
62年度卒業研究生	尾崎正基	鈴木悟司	長縄洋次郎
	平松孝之	柗津誠	林和夫
	松原美樹		
63年度卒業研究生	川田雄二	鈴木信哉	平井昌吾
	福尾暁正	吉田英治	堀田剛史
	前田英治	水谷友治	平松博次
	吉田貴史		
大学院生	浅井裕雄		

元年度卒業研究生 青山孝 川口英男 小笠原卓也
菅浩一 佐藤義久 中島隆幸
長沢次郎 行方勝彦

施工に当たっては木工事を杉村幸次郎氏、左官工事を下山政男氏に依頼し、学生の技術指導もお願いした。

昭和 61 年度において先ず現寸図を作製。見付け、見込み寸法の確認。材料購入の準備をした。

昭和 62 年度には敷地の選定、実測の後、基礎工事を行った。基礎工事は日本建築の伝統的手法の版築工法で実施した。即ち良質の山土を以て突き固め、その上に柱の礎石を据えた。

昭和 63 年度は材料の購入、木工事、屋根工事、壁の木舞掻き、荒壁塗り、炉、掛障子の折釘、竹釘製作等。

平成元年度は建具の製作、紙張り、壁上塗り仕上げ、壁腰紙貼り、行灯、脚榻、炭取、塵取、露地下駄等『数寄屋工法集』記載の諸道具の製作を行った。製作費用は

1 材料費 木材 竹 鉄物 縄 藤蔓 煎糠 石灰

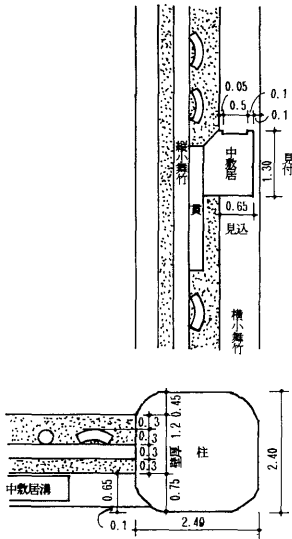
壁材料	畳	建具	紙類	1,761,659 円
2 工具購入				210,050 円
3 謝金				2,752,138 円
合計				4,723,847 円

礎石は小豆島の石材店中村龍氏から、棟瓦は岐阜市の美濃瓦協業組合から御寄附を受けた。紙面を借りて御礼申上げたい。又終始熱心に学生の指導にあたられた杉村幸次郎氏、下山政男氏に感謝し、御礼申上げたい。

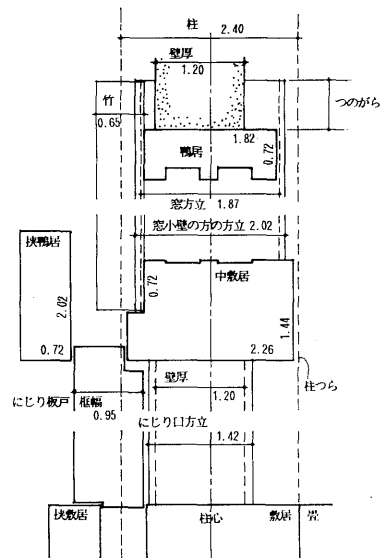
追 記

床の間の前の駆込み天井の板について

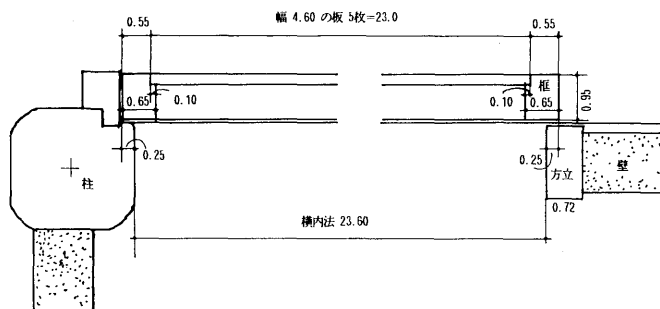
「屋杵裏長へぎ板 数 拾九枚 板はば式寸三分宛」とある。この天井の幅は 4 尺 7 寸 5 分あるから、19 枚で割ると 1 枚の幅は 2 寸 5 分だから、本文に 2 寸 3 分とあ



【図 1】にじり口を入れて右手壁下地窓障子の中敷居寸法(単位 寸)



【図 2】にじり口断面図(単位 寸)



【図 3】にじり口 板戸 (単位 寸)

るは誤刻であると論文の原稿の下書きを以前にしておいたが、復原の作業に取掛かってからそれは私の判断間違いであることに気が付いた。室内の駆込み天井は貼り方が外部軒裏と同じでよいから、敷目板貼りであって、敷目の幅が2分であれば、長へぎ板の幅は2寸3分で良い。

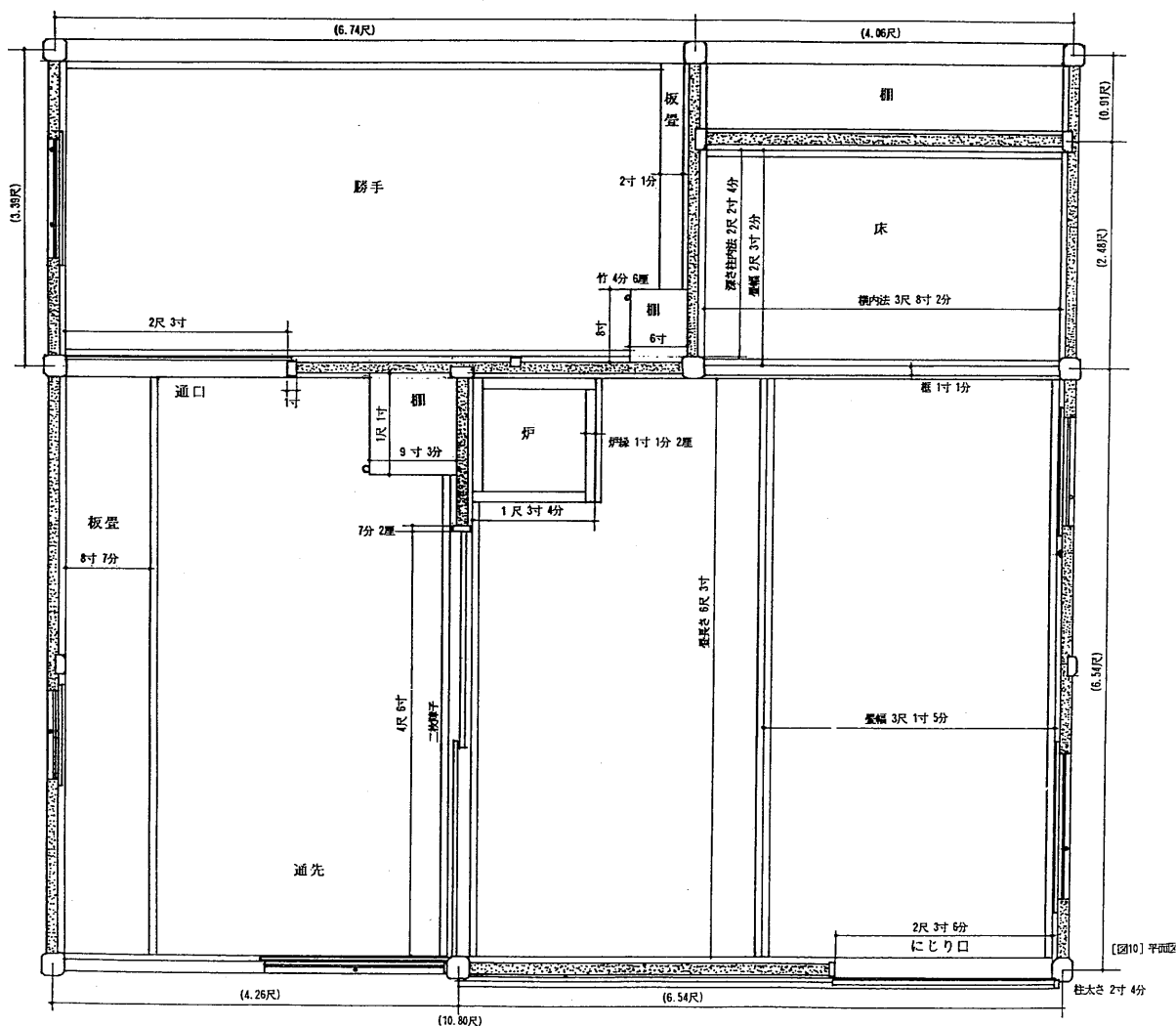
にじり口の板戸について

- 一、釘ハ板壹枚ニ七つ打なり
- 一、かまち九分半ニ六分半
- 一、板のはぎ四寸六分

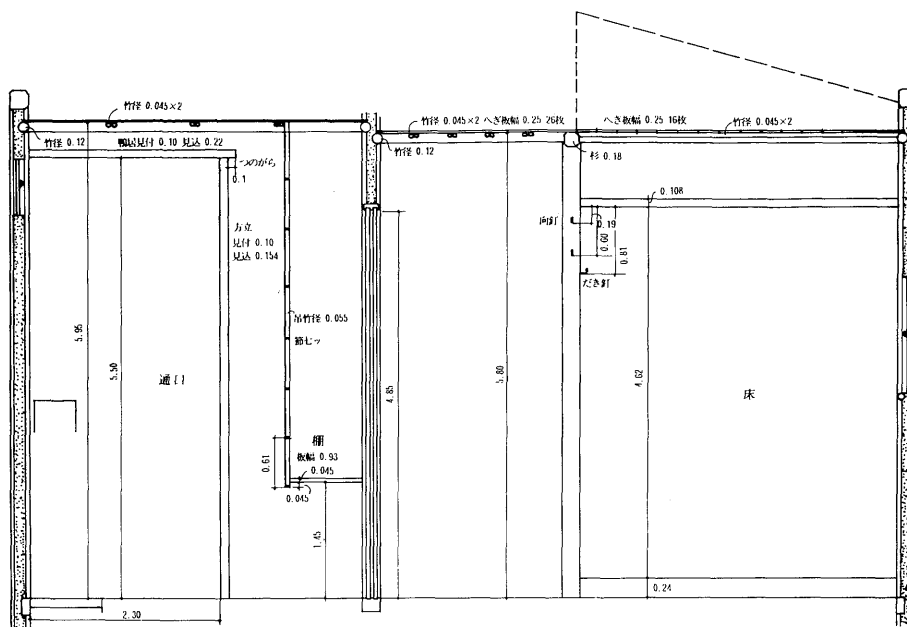
とある。にじり口横内法が2尺3寸6分である。障子の框は見込みのほうが見付けよりも大きいから、板戸もそう思ったが、原寸図を書いてみると、[図3]方立と框

のかかりしろが2分5厘しかない。もっと有ったほうがよいと判断して、見付け9分5厘、見込み6分5厘で製作したのが失敗であった。雨の日のにじり口の板戸が外の湿気で膨れて弓なりに外へ曲がって挟鴨居を押して動かなくなる。横棧がその力に耐えられないからである。やはり[図3]のようにすべきであった。復原考察にその様な知識が必要であるとはついぞ考えても見なかったことである。

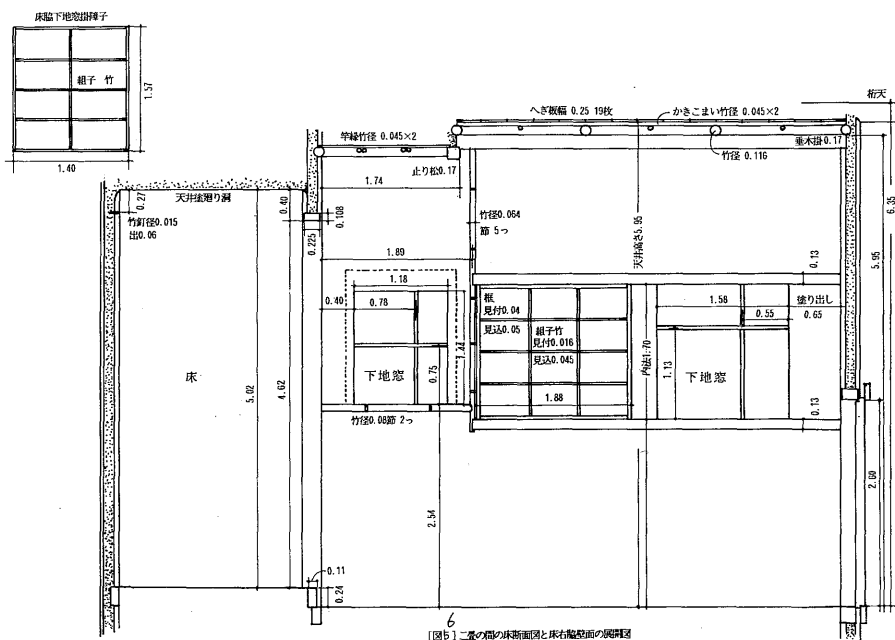
建築史学の研究に幅広い建築工学の知識、現寸図を作成しての研討、実物大の復原工事等が必要なことを痛感したことも付記しておきたい。



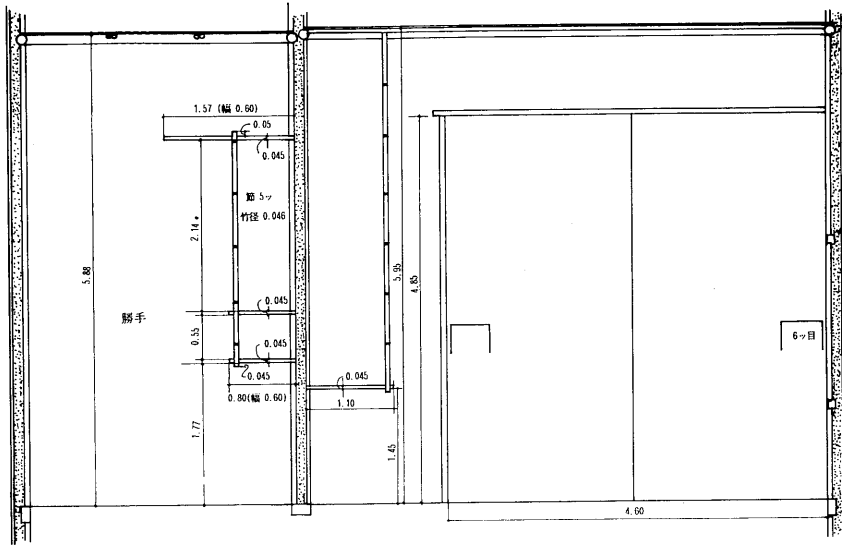
【図4】平面図



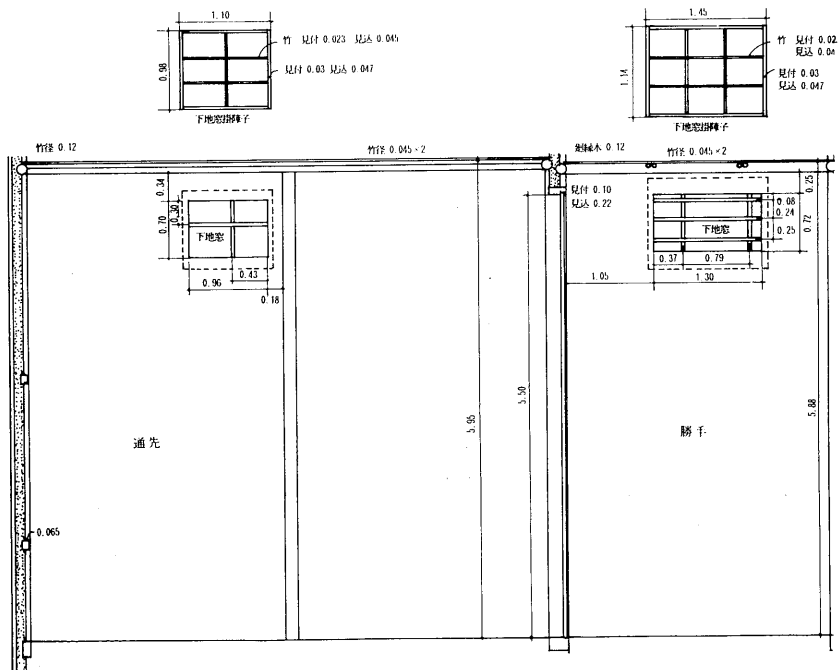
【図5】二畳の間の床と次の間の通口側の展開図



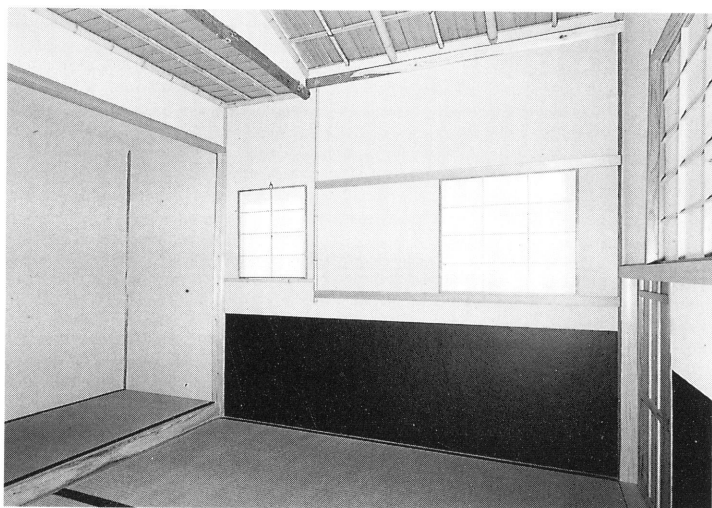
【図6】二畳の間の床断面図と床右脇壁面の展開図



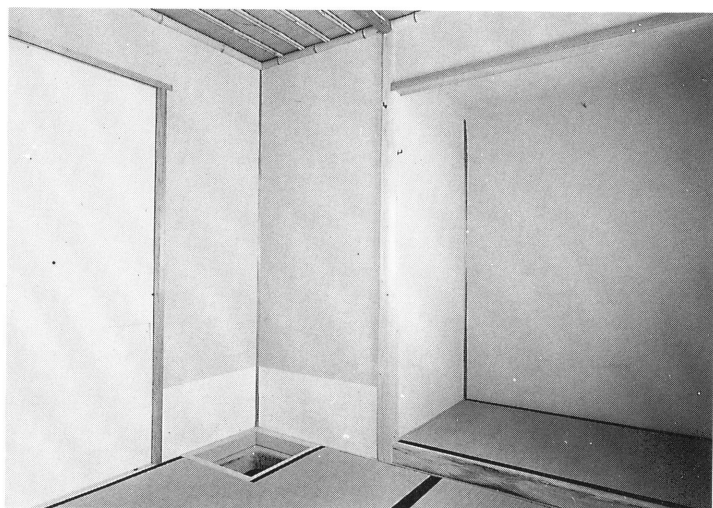
【図9】次の間の二畳の間境壁面と勝手三重棚壁面の展開図



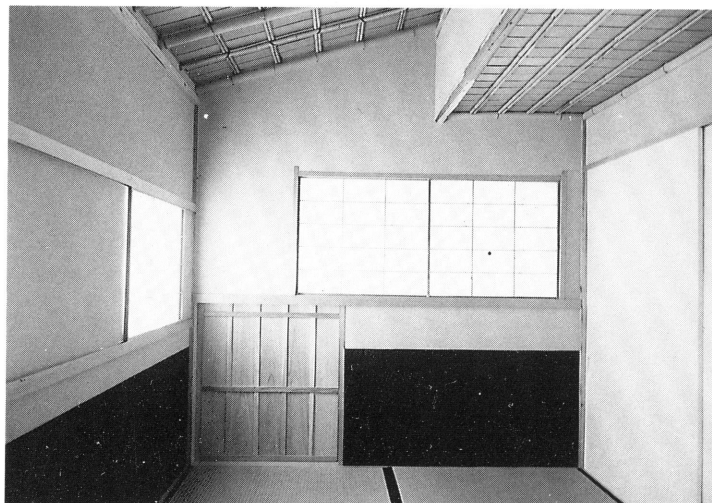
【図10】次の間と勝手の下地窓壁面の展開図



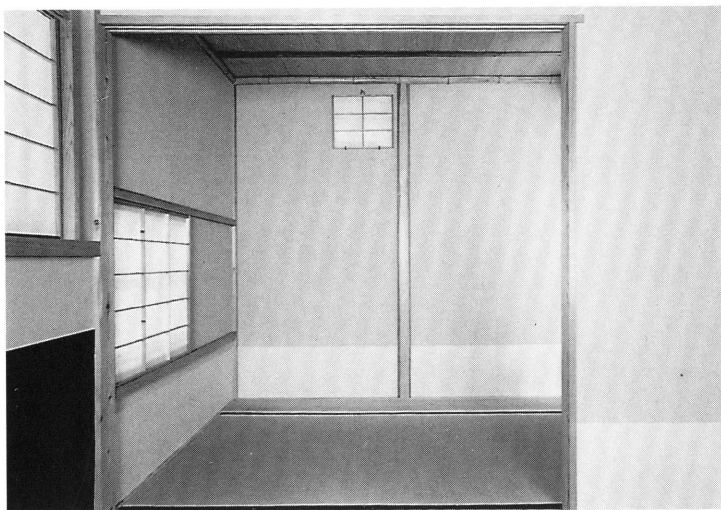
床の間、地下窓、にじり口



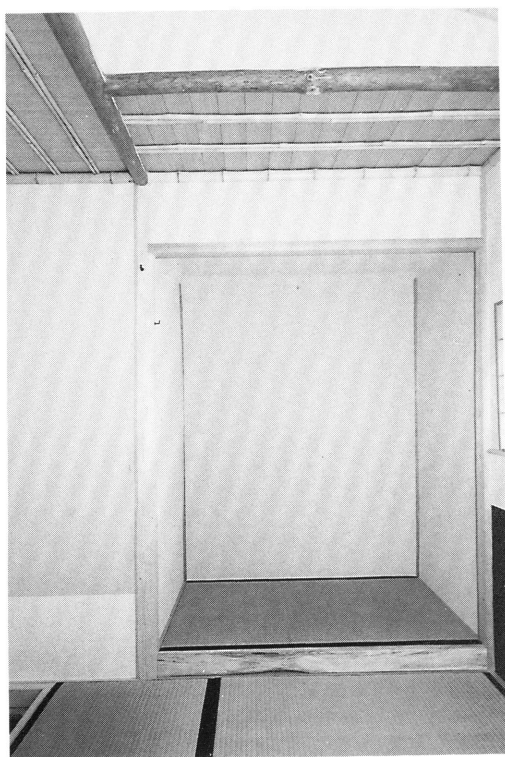
隅炉



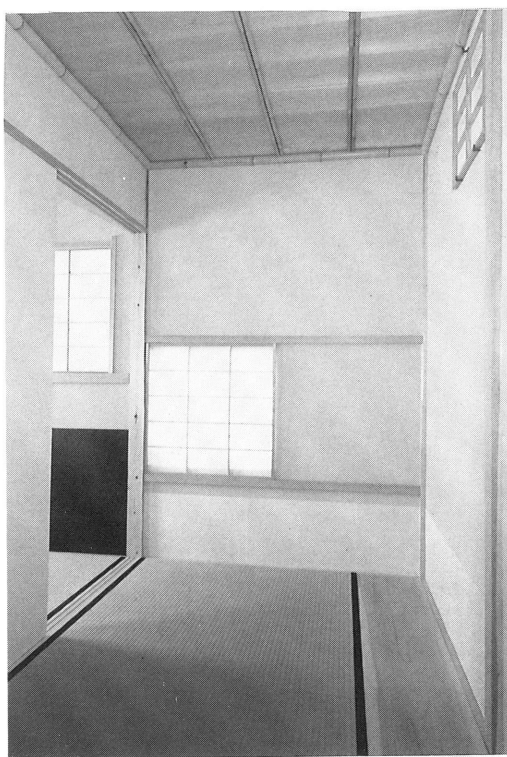
にじり口



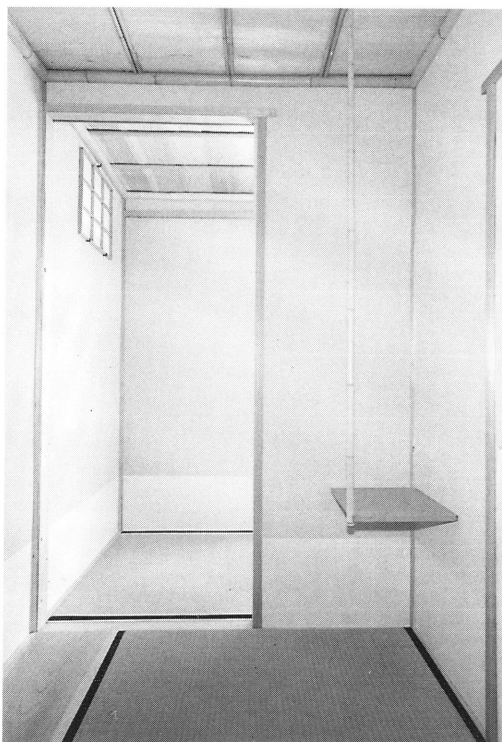
次の間



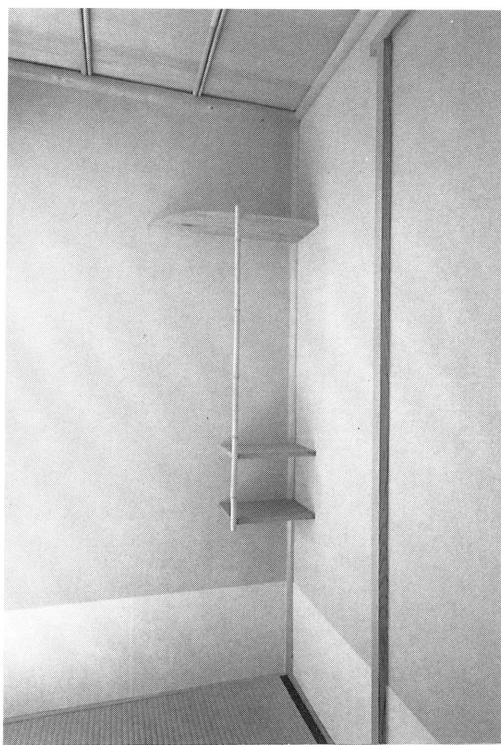
床の間



通先窓



通口の一重棚



勝手三重棚